

## ★苦境の外国人労働者への支援に取り組む＝今野 久

どんなに中南米諸国のサッカーが強く、またサンバやルンバそしてタンゴが優れた文化であったとしても、それらの地域の国々は紛れもなく発展途上国である。マルクスがいうような「不均等発展の法則」が、先進国と発展途上国の間で起こっている。

途上国であることを感じさせるのは、日本が不況になったときである。顕著に表れるのは、自動車や電機の生産現場である。労働者の扱いが日本人と外国人とでは、大きく異なり差別がまかり通っている。リストラの対象になるのが彼ら「不安定雇用」といわれる、非正規で働く労働者である。つまりは途上国からやってきた、外国人労働者である。時にそうした現れがあり、コロナも同様である。イヤ、今回はブラジルに帰国できないのだからそれ以上といえる。予想を超えた災難が彼らを襲っている。

最近、群馬県大泉町でその実態をみた。ラテンの人々やアジア人は、日本人よりはるかにオープンでフレンドリーである。陽気な彼らは数人でよくコンビニでたむろし、酒を飲み煙草を吸いながら話し合っている。私は彼らに勇気を出して声をかけてみた。

すると「三月ころ解雇され職を失って困って」、「シンジカート(労組) 良いよね」「ポリス怖いね・・・」など、初対面ではあったが会話ができた。なんと！携帯の電話番号も教えてもらって。彼はデニーという、日系ペルー人であった。

コインランドリーで洗濯していると、困っていそうな如何にも日系人と思える労働者が腰かけていた。見かねて声をかけると、「ペルー人とケンカして、クビになった」「寮を追い出され野宿です・・・」といていた。電話番号と名前を教えてもらい、その場を後にした。後日連絡があったので、反貧

困ネットに連絡した。ネットに生活保護の申請をしてもらい、アパートを借りてもらった。その途中、「具合が悪くなり（吐いて）救急車を呼んで入院した」と聞いた。命に別状はなかったとも、聞いている。

現在、日系のブラジル人は全国に約20万人が暮らしている。しかし彼らの中で日本国籍を取得して参政権を得ているのは、僅かである。同じ税金を支払い、有形無形で企業や地域社会に貢献している。そうした彼らが、不況だからという理由だけで、差別的な扱いを受けることは許されない。同時に参政権も与えられていないとしたら、ことのほか理不尽ではないか。今回の一時金10万円の給付金にしても、「外国人には与えなくてよい」という主張をする国会議員がいる現状である。

そうした現状を憂い許さないで、変革しようとする日系ブラジル人の仲間がいる。意気を感じた彼らが、日系ブラジル人の聖地とする日系人の人口密度が日本一高い群馬県大泉町で、外国人労働者を救済する活動を開始した。その名は「リスタートコミュニティー支援センター」であり、その設立運動に立ち上がっている。

（定年退職後の休みで休職中だった自分は、その話をきいて何とか力になりたいとボランティアで立ち上げの運動に参加した。5月11日から、現地（ブラジリアン・プラザ）に泊まり込み主に現場の責任者としての仕事をしながら、支援を求める苦境の日系労働者の実態に触れ、その余りの悲惨さに移民も逆移民も基本では同じであると思った。日本政府の移民施策が何ら変っていないことを、再認識した。移民は棄民でしかない。「どうせ、こんな政府では国民も大切にされているはずがない」とも思った。

南米からの逆移民政策が開始されてすでに、30年が経つ。この間、日系社会も高齢化が進み、日本でも起こっていることであるが、日系人の孤独死が見られるようになった。そして引き取り手のいない、5人ほどの遺骨が在日ブラジル領事

館に保管されている。キリスト協会にしても同じことが起こっている。そのほか、かつてフィリッピンの子供にあったジャパユキさん現象も起こっている。

そしてこの問題が、日本の行った誤った移民政策の結果であることも、強調しておきたい。移民が勝手に南米に移住したわけではない。移民は国策で行われ、移住要項に応募して南米に渡ったのだった。その窓口は都道府県の役所に置かれていたし、行政機関は積極的に移住を押し進めてきた。

また、いわゆる「出稼ぎ」と称する「逆移民」にしても、南米移民の子弟を安価な単純労働な労働力みなした。その労働力を必要として、1990年に「入国管理および難民認定法」を改正し、その結果として「出稼ぎ」現象が起こったのである。

いま設立が大詰めをむかえる「センター」に携わっているのは、私を含めて殆どが日系のブラジルだ。私たちとしては、本当は、日本の方々にもっとも多く、参加してほしいと思っている。とくにAALA諸国民との連帯をかかげる日本AALAには、運動への理解と参加を特に期待している。

日本の移民政策の全てが間違っているとは、思っていない。北米移民は、戦争で敵性外国人として酷い扱いにされたことを除いては、大方のところでは成功している。その証拠に北米からの逆移民は皆無だ。北米移民は、「水は高きより低きに落ちる」（悪い所から、良い所に移住することの例え）の原則に沿って行われた。残念ながら、南米移民はこれに反して行われた。

移民の過酷さといったランク付けすれば、最下位がドミニカ移民だ。次に満州や南米へと続き、北米移民はその中でも良い方といえるだろう。その他、北米移民に含まれるが、趣を異にするハワイ移民も過酷であった。

南米移民は農業移民が大半だった。農業は小規模とはいえ、熱帯雨林の開拓で破壊が伴う。それを一概に批判はできないだろうし、当時の時代背景を考慮する必要がある。あわせて、今後農業のあり方も見直しがされなければならないだろう。同時に生きることの基本として、農業を位置づけ再評価もしなければならないと考える。

「スタートコミュニティー支援センター」とは、そうしたことの人間としての基本を考える場などと思っている。多くの方々の、参加をこころから願う。

(了)